

## 日本人英語学習者にみられる同意のストラテジー

服部 幹雄

### Japanese EFL Learners' Use of Response Strategies in Agreements

Mikio HATTORI

#### 1. 目的

隣接対句の2番目の発言において、期待に添わない応答は複雑で手の込んだものになる傾向があるのに対し、期待される応答は簡略に行われることが、エスノメソドロロジーの領域の多くの研究によって明らかになっている。たとえば、Pomerantz (1984)では、期待に添わない不同意の応答はもって廻った長いものになるが、期待に添う同意の応答は簡略になる傾向があることが示されている。では、日本人英語学習者(以下JLE)にとって同意の応答は困難なく行えるものであろうか。おそらく、不同意の応答の場合ほどではないにしても、それなりの困難さを伴うに違いない。その理由は、英語母語話者(以下NSE)による現実の会話では、期待に添う同意であれば押しなべて簡略な応答になるわけではなく、同意の応答に含まれる情報と話し手・聞き手との心理的距離<sup>1</sup>に応じて、同意のストラテジーが変化する現象が見られるからである。つまり、JLEは自分が置かれているなわ張り関係を認知し、それを使用するストラテジーに反映させなければならないのである。構文生成能力が低く、利用できる定型表現が限られているJLEにとって、これはかなりの負担となるであろう。現実にも、JLEは1語あるいは多くても数語までの単語を並べただけの短い、一本調子の応答をする傾向が見られる。

本稿は、情報のなわ張り理論<sup>2</sup>に基づいて、JLEの同意の応答を分析し、各なわ張り関係の下で用いられるストラテジーの特徴を明らかにすることを目的とする。なお、本研究ではNSEの同意のストラテジーも分析したが、これはJLEの振る舞いを浮き彫りにすると共に、英語教育への応用への道筋をつけるためである。言うまでもなく、JLEの言語上の欠落を発見し、その欠落を埋め合わせる手立てを考えるには、NSEとの比較を避けるわけにはいかない。

#### 2. 方法

データ収集はMaynard (1993)が信頼できるとしている方法によった。すなわちNSEに依頼して、さまざまな場面で彼らがJLEと交わした会話を録音してもらうという方法である。依頼したNSEはアメリカ人男性3名で、彼らが会話を交わしたJLE<sup>3</sup>の人数はのべ11人、録音時間はのべ4時間30分に及んだ。収録された会話から、なわ張り関係が特定でき、かつNSEが陳述を行い、JLEが同意を行っている「陳述-同意」の隣接対句約350を抽出した。NSEのデータについては、服部(1996)のために準備した録音資料を利用し、ここから約400の隣接対句を抽出した。こうした得られたJLE、NSE両者の応答をなわ張り関係に基づいて分類し、それぞれのなわ張り関係の下で生じている同意の応答の特徴を明らかにした。

### 3. 同意のストラテジー

ここでは、(C)、(B)、(A)、(D)の4つのなわ張り関係の状況下でのJLEによる同意の応答を見ていく。<sup>4</sup>なお、陳述を行うものを聞き手、同意の応答を行う者を話し手とする。以下の例では、JLEのYがNSEのXの陳述に対して同意の応答を行う隣接対句になっている。つまり、同意の応答を行うYの立場から見て(C)、(B)、(A)、(D)のどのなわ張り関係が成立しているかを見るわけである。

#### 3-1 (C) の場合

(C)は話し手が応答の中で、聞き手のみのなわ張りに属する情報について表現する場合である。

- (1) X: I brush my dog EVERY day.  
Y: I know. # It's good # for your dog.
- (2) X: I always write my appointments on my calendar.  
Y: ♪: That's a good idea.
- (3) X: I'm better off alone.  
Y: Yes, I think so.

(1)、(2)では、Xが自分の習慣について発言し、Yが同意を表明している。Xの個人的な習慣についての情報は、Xが直接体験によって得られる情報であるから、Xのなわ張り内にある。一方、Yはこの情報を伝聞によって知っていたに過ぎず、この情報はYのなわ張りには属さない。(3)では、Xが居住形態に関する好みについて発言し、Yが同意を表明している。Xの個人的な好みについての情報は、Xのみが直接知覚することによって得られる情報であるから、Xのなわ張り内にあるが、Yのなわ張りには属さない。(1)～(3)の事例において、YはXの陳述に含まれる情報を知っていたにもかかわらず、自己のなわ張り内に取り入れることができない点が重要である。

この状況下でのJLEの同意の応答は、(3)のように“容認(accept)<sup>5</sup>+聞き手の陳述に対する肯定的評価 {or 聞き手と同様の評価、事実を共有していることの表明}”が典型的なパターンである。(2)のように容認あるいは聞き手の陳述に対する肯定的評価のどちらか一方だけが現れる事例も多い。容認の具現形はほとんどがyesであるが、若干ながらI seeも見られる。聞き手の陳述に対する肯定的評価で用いられているのはThat's great {or good}.等数種類の定型表現に限られる。(1)のように、応答手番(response move)の冒頭に、聞き手の陳述に含まれる情報が既知であることを示す表現が来る例も若干ある。NSEの場合は、認定(acknowledge)<sup>6</sup>が応答手番の冒頭に単独で現れる事例がもっとも多い。認定の具現形としては下降調、水平調の[(h) m]、yeah、uh huhが中心となる。次いで目立つのが容認の具現形yeah、I knowが単独で現れる事例である。JLEと異なり、聞き手の陳述に対する肯定的評価や話し手が聞き手と同様の評価、事実を共有していることの表明は少ない。

NSEの場合、Cの状況下では、通例、簡潔かつ間截的な表現が使用される。間截的であるのは、聞き手の陳述に対する明確な支持が聞き手のなわ張りを犯す、言い換えれば消極的顔(negative face)を威嚇するためである。一方、JLEの応答は簡潔ではあるが、必ずしも間截的であるとは言えない。特にNSEが用いる認定の具現形がJLEによってほとんど使われて

いないことは、J L EがCのなわ張り関係に応じた認定、容認の具現形の選択能力を十分に持たない証左となっている。もっとも、聞き手の陳述を明示的に支持する裏付け(endorse)<sup>7</sup>の具現形(たとえば下降調の yes、that's right、exactly 等)がほとんど使用されない点はNSE、J L Eを問わず見られる特徴である。なわ張り関係の認知はJ L Eによってなされているものと考えられる。

### 3-2 (B) の場合

(B)は話し手が応答の中で、話し手、聞き手双方のなわ張りに属する情報について表現する場合である。

- (4) X: There was a train accident in Gifu.  
Y: Yes, I know.
- (5) X: Of course everybody want kind neighbors.  
Y: I think so.
- (6) X: It was very hot yesterday.  
Y: Yes, it was. # It was ɑ: about # thirty three degrees.

(4)では、Xが前日岐阜で起こった列車事故について発言し、Yが同意を表明している。列車事故についての情報はマスコミによって大きく報じられており、X、Y双方が伝聞によって得た確実とみなす情報であると考えられる。したがって、この情報はX、Y双方のなわ張りに属する。(5)はXとYが寮での人間関係について交わした会話の一部である。Xが寮での理想の隣人について発言し、Yが同意を表明している。X、Yはかつて寮生活を体験しており、寮での隣人についての情報は、X、Y双方が直接体験によって得られる情報である。よって、この情報はX、Y双方のなわ張り内にある。(6)では、Xが前日の天候について発言し、Yが同意を表明している。天候に関わる情報は、X、Y双方が直接体験によって得られる情報であるから、X、Y双方のなわ張りに属する。

この状況下でのJ L Eの振る舞いの特徴は、Cの状況で見られた容認の形式に加えて、聞き手の陳述を明示的に支持する裏付けが応答手番の冒頭で観察されることである。用いられる容認、裏付け表現の種類は非常に限られており、(4)、(6)のように“yes+ 直接形の文”あるいはyesが単独で生起する事例が大半を占める。評価に対する応答ではこれらに加えて、(5)に見られるI think so.、I agree with you.、Me too.等の定型表現もよく用いられる。裏付け表現としてNSEが頻繁に用いるexactly、absolutelyはJ L Eの応答にはほとんど見られない。さらに、NSEは、評価に対する同意において、裏付けの表現を繰り返したり、聞き手の用いた評価語を強意語で強めたり、一層強い評価語で置き換えたりすることが多いが、これらの手立てもJ L Eの応答には観察されない。一般にJ L Eは聞き手の積極的顔(positive face)を保持するストラテジーは使いにくいと言えそうである。

一方、聞き手の陳述の明示的な支持が応答手番の冒頭でいち早く表明されること、応答手番の冒頭にストラテジーとしてのポーズや談話辞がほとんど見られないことはNSE、J L E共通して見られる特徴である。これは応答が聞き手の期待に添うものであることを反映するものであろう。

### 3-3 (A) の場合

(A)は話し手が応答の中で、話し手のみのなわ張りに属する情報について表現する場合である。

(7) X: I hear they (=Umeboshi) are saltier than anchovies.

Y: Yes, it's VERY salty.

(8) X: Someone told me you live with your sister.

Y: Yes.

(9) X: It seems like you forgot all about it.

Y: Yes. I get # get on well now.

(7)では、アンチョビの味は知っているが梅干しを食べたことのないXの発言に、両者とも食べた経験を持つYが同意を表明している。梅干しの味についての情報は、Yのみが直接体験によって得られる情報であるから、Yのなわ張り内にあるが、Xのなわ張りには属さない。(8)では、XがYの居住状況について発言し、Yが同意を表明している。Yの居住状況についての情報はYにとって重要な個人的事実を表す情報である。一方、Xはこの情報を伝聞によって得たに過ぎず、この情報を近とする理由がない。よって、この情報はYのみのなわ張りに属する。(9)では、XがYの心的状態について発言し、Yが同意を表明している。itはYがしばらく前から悩んでいた人間関係のトラブルを指す。Yの心的状態についての情報は、Yのみが直接体験によって得られる情報であるから、Yのみのなわ張りに属する。

この状況下でのJLEの応答は、簡潔で直截的であるのが特徴である。聞き手の陳述を明示的に支持する裏付けが応答手番の冒頭で現れる事例が大半である。裏付けの具現形は単独のyesあるいは(7)のような“yes+直接形の文”のいずれかにほぼ限られると言ってよい。裏付けが直接形の文のみで行われる事例も若干ある。NSEの応答に類出する exactly、absolutely はほとんど観察されなかった。間接形の文、ストラテジーとしてのポーズや談話辞がほとんど現れない点はNSEの場合と同じである。

Aの状況下で見られる簡潔かつ直截的な応答は、いわば話し手が情報を独占しており、聞き手の消極的顔を威嚇する危険がないことを如実に物語っている。JLEの応答は、裏付けの具現形のバリエーションが少ないことを除けば、NSEの応答に極めて近いと言える。

### 3-4 (D) の場合

(D)は話し手が応答の中で、話し手、聞き手どちらのなわ張りにも属さない情報について表現する場合である。

(10) X: I hear Teruko wants to get a job somewhere near Toyohashi.

Y: ♪: I have heard it.

(11) X: Yumi seems to like Japanese furnishings.

Y: Yes, but I I ## don't know her interests.

(12) X: Oh, I think it's called Takayama line.

Y: I don't know. But # maybe ♪: I think right.

(10)では、Xが教え子の Teruko の勤務希望地について発言し、Teruko のクラスメートである Yが同意を表明している。X、Y共に Teruko と特に親しいわけではなく、Teruko の勤務希望地についての情報は伝聞に基づくものでしかない。よって、この情報はX、Y双方のなわ張りには属さない。(11)では、Xが教え子の Yumi の調度品の好みについて発言し、Yumi のクラスメートである Yが同意を表明している。X、Y共に Yumi と特に親しいわけではなく、Yumi の嗜好、趣味についての情報は伝聞に基づくものである。したがって、この情報はX、Y双方のなわ張り外にある。(12)は(4)のしばらく後に交わされたもので、Xが列車事故の起きた路線名について発言し、Yが同意を表明している。X、Yは共にこの路線を利用したことがなく、この路線が通る場所も双方にとって深い地理的関係を持たないため、路線名についての情報は双方のなわ張り外にある。

この状況下での J L E の応答は、(10)のように聞き手の陳述に含まれる情報が自己のなわ張り内になくことの表明が単独で現れるのが代表的なパターンである。ここで用いられるのは大半が I think so. あるいは I heard so. 等伝聞情報であることを示す表現で、間接形の文は少ない。次いで多いパターンは、(11)のように容認 {or 伝聞情報であることを示す表現} に続いて but I don't know ~ 等聞き手の陳述に含まれる情報を知悉していないことを示す表現が来る事例である。容認の具現形はほとんどが yes であった。聞き手の陳述を明示的に支持する裏付けはまったく見られない。NSEの応答は、断定を避けた間截的な表現が使用される点では J L E と類似している。ただし容認は一般に使用されない。また、応答手番の冒頭で、伝聞情報であることを示す表現に加え、yeah 等の認定や間接形の文が多用されるのが特徴である。

Dの状況下で、先行する陳述に含まれる情報が自己のなわ張り内になくことの表明が現れるのは、J L E がなわ張り関係を認知している証拠である。さらに、聞き手の陳述に含まれる情報が不確実なものであることを示す表現も、Dのなわ張り関係が反映されたものである。ただ、J L E の構文生成能力の低さゆえ、NSEが用いる間接形の文の生成までは至らないということであろう。

#### 4. まとめ

A~Dどの状況下でも、J L E の応答はNSEとくらべると直截的なものになる傾向がある。また、聞き手の陳述の最小限の確認である認定や積極的丁寧さ (positive politeness) のストラテジーが使いにくいこと、談話辞や容認、裏付けの具現形の種類が乏しく、定型表現に頼りがちなことも J L E に顕著な特徴として挙げられる。要するに、自分のなじんだ少数の表現を多用する一本調子の応答になっているのである。

その一方で、J L E はNSEとは異なる方法で自分が置かれたなわ張り関係を応答に反映させている点に注目したい。用いられる定型表現の種類こそ少ないものの、その選択は決して恣意的なものではない。なわ張り関係の認知は正確に行われているのである。ただ、構文生成能力の低さと語彙の乏しさゆえに、負担の軽い、直截的な定型表現が過度に使用されているということである。

以上の知見は J L E に対するスピーキング指導にどのように役立てることができるだろうか。まず、J L E にとって苦手な間截的な表現が要求される C、D の状況における応答の仕方をロールプレイなどを用いて訓練させることが大切であろう。その際、この2状況でNSEが頻繁に用いる認定の具現形に習熟させることが重要である。もちろん、なわ張り関係を問わず、J L E とNSEが用いるストラテジーの差異、および同意の応答に欠かせないメタ発話相互作用

用的機能を持つシグナル(認定、容認、裏付け)についての指導が必要なことは言うまでもない。その指導のための教材の作成、指導法の確立も重要な課題であるが、これについては稿を改めて論じたい。

#### 注

- 1 これを神尾(1990)はなわ張り関係と呼んでいる。
- 2 詳細は神尾(1990)を参照。
- 3 J L E の英語運用能力はほぼ英検2級合格者のレベルである。
- 4 以下の会話データ中の固有名詞は仮名にしてある。表記上の約束は次の通り。なお大文字は音調の卓立を示す。
  - ・ 文末のイントネーションが認められ、文と認められる発話の終わる個所
  - # 発話中はっきり認められる silent pause
  - ## やや長めの silent pause
  - ə, əm filled pause
  - ə:, ə:m やや長めの filled pause
- 5 前言の命題内容を理解したことを示すシグナル。
- 6 発話が聞き取られ、談話の流れに受け入れられたことを示すシグナル。
- 7 先行発話を明示的に支持するシグナル。

#### 参考文献

- Aikawa, M. 「短大におけるスピーキング授業で学習者の発話量を高める試み」. 『中部地区英語教育学会紀要』 26, 141-146.
- Coupland, N., H. Giles & J. M. Wiemann (eds.) 1991. "Miscommunication" and Problematic Talk. Newbury Park: Sage.
- Gass, S. M. & J. Neu (eds.) 1996. *Speech Acts Across Cultures*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hattori, M. (服部幹雄) 1996. 「『不同意』の応答ストラテジー」. 『筑波英語教育』 17, 1-12.
- Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 『情報のなわ張り理論』. 東京: 大修館.
- Maynard, K. S. (メイナード・K・泉子) 1993. 『会話分析』. 東京: くろしお出版.
- McCarthy, M. 1992. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McKay, S. L. & N. H. Hornberger (eds.) 1996. *Sociolinguistics and Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes," in Atkinson, J. M. & J. Heritage. (eds.) 1984. *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis*. Chicago: University of Chicago Press.
- Wolfson, N. 1989. *Perspectives*. Cambridge, MA: Newbury House.